警衆餘言

186
254

186-254
1200800024494

警衆餘音

186-254

雙蓮堂

大正
8. 5. 8
内交

岡山歌

曉日岡山未鐸鳴惟今自
治不令鶴吏民悉道長官
好
天子御扉書姓名

清郊

警衆餘音

岡山縣の紋章

岡山縣知事　笠井信一

岡山縣の紋章は鈴である、古篆を案ずるに岡は〇にして山は〜なり併合すれば則ち〇其形狀鈴の如く岡山縣に與へられたる自然の紋章である。

凡そ鈴は古來各民族の造製使用したるものにして、之に依つて金

銀銅鐵の鑄造法、合金術の進歩、意匠圖案の巧拙、東西民族の風習を論ずべく文化史上極めて有力なる研究資料である、遞信省は驛鈴の關係を以て古今東西の鈴類を蒐集して居る。其の陳列室を一覽する者は、其種類と用法の饒多なるに驚くであらう。我が國に於ては、天之宇受賣命の打振る鈴の音、天之窟戸に響かせ給へる神代の昔より、今の世の電氣仕掛の呼鈴に至る迄、種類用法種々雜多、神樂に用ひらるゝは言ふ迄もなく、釧の鈴、手の鈴、足ユヒの鈴、太刀の鈴、鉾の鈴、弓弭の鈴、鏡の鈴、牛馬にも附ければ、鷹にもつけた、下駄にも付ければチンコロの頸にも付けた、軒に吊るせば風鈴にして泥棒避けは門鈴と云ふのである。

鈴はサナキ、サナル、ヌデなどとも云ふが、スゞと云ふのが世間並にして、和訓栞にスゞは音の凉しきより名くとかや、神樂の鈴は十二顆を攢簇して神慮をスゞしめるの意なりと云はれ、徒然草の「内侍所ノミ鈴ノ音ハメデタク優ナルモノナリトゾ德大寺ノ太政大臣ハ仰セラレケル」誠に賢所の神庭に鳴り渡る御鈴の音は森嚴のものである。六帖には「八ヲトメノ振ルテフ鈴ノコロ〳〵」と蟋蟀の可愛の者もあるが漢書に「丙戌地大動鈴鈴然」と物騷極まる恐ろしいものもある、鈴の種類に依りてズル〳〵、リン〳〵、ガラン〳〵色々の音色がある詩

經に所謂、和鈴央々とか和鑾雝々とか言ふのはどんな音色か、まだそこ迄は道樂が及ばない支那の昔、人君乘車、四馬鑣八鑾鈴象鸞鳥聲、こいつ鳥の鳴く音を氣取れると見ゆ。

兎に角、鈴は人心を刺擊する働きを有して居る、動けば必ず鳴ると云ふ活動家である、鈴鐸警耳、鐘鼓駭心、とは支那人許りの考へではない、to shake the Bell (振鈴) と云ふ熟字は覺醒する、活動する意義である、古今東西、鈴に關する觀念は悉く同一である、餘計の話だが日本の人がよく時の鐘と云ふが外國人も又八時と云ふ所を eight Bells と云ふではないか、秋草の蔭にチンチロリンの音を聽きて鈴虫を思ひ、花の形が似たりとて鈴蘭と名くる如く、西洋には禽獸草木に Bell を冠れる名稱甚だ多い。

說文に金鈴にして金舌なるものは之を金鐸と謂ひ金鈴にして木舌なる者は之れを木鐸と謂ふ、何れも命令を施すべく人心を警戒する爲に振れる大鈴なり、武事には金舌の者を用ひ文事には木舌のものを用ゆるを例とした、八佾に天將以夫子爲木鐸也と鈴鐸の用極めて偉なり、未だ觀ざれども貴ぶべきは楠公の神鈴である、建武乙亥の年楠公銅鈴を造りて鎭宅靈府の武神を祭りて皇運を扶翼す、盤谷先生の楠公神鈴記に謂へるあり顧者、楠公料天下遂大亂、造是鈴、以用於禍

祭歟、夫鈴者所鳴焉以告神警人也、公精誠貫日月、其初擧義兵、誓天指斗、以彈丸孤城、當百倍之軍、賊卒不能克、由是而四方勤王之師作焉、以滅北條氏而中興之業建矣、此豈非公之中心告諸神而神聽焉警諸人而人應焉乎と一個の銅鈴も楠公之を振れば忠烈の氣磅礴回天の偉業をなす。も一つ評判ものにヒラデルフヒアの Liberty Bell がある、千七百七十六年亞米利加合衆國の獨立を宣言したるとき打鳴したる自由鐘である、鑄付けられたる文字を讀めば全國民の自由を宣言す Proclaim liberty throughout all the land to all the inhabitant thereof. とある、此の心常に米國人の胸を往來し、此度此の種のベルを造りてチエックスラヴォックの獨立祝に贈ると云ふことである自由、正義の言の葉が當世世界の人氣者ウイルソン大統領の口を衝て出づるもの此のベルの精神である、日本人たる者常に楠公神鈴の心にあやかれや。

外國ではレースの一等賞に Bell を授與したる古例がある、其の爲にベルを得ると云ふ熟字 (to Bear the Bell) が戰勝又は優者を意味し (to lost Bell) で敗者と云ふことになつた我等は今岡山縣の紋章に鈴を得た、優者たるべき自然の約束が明瞭になつた、我縣民は常に此の紋章を仰で覺醒せよ、此紋章の下に集りて活動せよ、善人の鈴生、學者の鈴生、實業家の鈴生、物産の鈴生、何んでも善事は鈴生らせ、お伊勢樣

の五十鈴の川の淙々と流れて盡きぬがごと、文明の中心は本縣であることにしようではないか。

鈴の話

坂田九峰先生述

漢土に於ける鈴の話をせよと、折角何有明府の懇囑ではあるが、自分は漢學者でもなく、又考古家でもなく、但だ一隅の小詩人として、詩の方面から坐右の有觸れた書物の中の事柄を少しばかりお笑種に話してみる位な事しか出來ないのは遺憾である

邦語の「すゞ」は漢文字にて普通「鈴」と「鐸」との二字で表はすことになつて居るが、此外に和、鸞、鑾、錫なぞも鈴と訓ずる場合がある（後を見よ）

鈴と鐸との差異は其大小にあるので、鈴は小、鐸は大と心得て居れば足れりであらう、而して鈴の形はどうかと云ふに、圓くして中裂し、銅丸子を腔内に錮してあるのが一とつと、それから鐘の形を成して、中に舌(振り)を有するものが一とつと、此二種類である、岡山縣章の岡山は前者に象りてあるが、しかし詩歌なぞに咏ずる場合、又これからお話しやうとする事柄は、両者何れを問はずである

漢土の鈴や鐸は、何れの時代に創製せられたものか、兎に角、我邦紀元頃には、最早彼地には鈴があつたのである、全體鈴は鳴るといふことが其本性であるから、古來樂用、警醒傳令用に供せられ、又有音の垂飾として用ゐられてある、而してそれが政事向きや、公式の路儀儀衛なぞに使はれてあるのが多い

和鈴央々(詩經)　和在軾前、鈴在旂上(毛傳)

錫鸞和鈴、昭其聲也(左傳)

五路皆有錫鸞之飾、和鈴之響(晉書輿服志)

鑾聲噦々、和鈴鈌々(東京賦)

結以輕軒、節以和鈴(傳休奕良馬賦)

流藻周旋、和鈴重設(赭白馬賦)

鸞在衡、和在軾、皆以金爲鈴、(周禮夏官大馭凡馭路儀以鸞和爲節註)

齊永明制玉輅上施重屋、棲鳳凰、綴金鈴、云々(隋書禮儀志)

鑾制、有青緋皁白黃五色、上有朱蓋、下垂帶、帶繡禽羽、末綴金鈴(宋史儀衛史)

和鸞雝々(詩經)、在鑣曰鸞、謂鸞鈴置於馬之鑣、一作鑾(疏)

動玉朝而雲披鳴鸞鈴而日陽(曹植喜霽賦)

有鈴曰旂、注、懸鈴於竿頭、畫龍於旒、(爾雅)

楚望傾灑滌、日館仰鸞鈴、(王融樂歌)

登車有和鸞之節、注、鸞以金爲鸞鳥而銜鈴、焉施於鑣上、(漢書五行志)

五輅衡上金爵者朱雀也、口銜鈴、鈴謂鑾、所謂和鸞也、(古今注)

八鸞在衡、二鈴在軾(文獻通考)

六鈴七鈸、置之兩傍、(同上)

以上は鈴が垂れ飾となり、同時に其發する音が節を爲すといふ所を取りて、路儀、儀衛等に用ゐられて居る例である、而して前記の和、鑾、鸞、錫なぞが同じく鈴と訓ずる所以も自然解る、又和や鸞の取り付けてある物と部位とが知れる、

次には警醒傳令用の而かも政事向きの方を擧ぐれば左の如くである、尤も是には文事と武事とに由り鈴の舌が異なつて居る、文敎には、木鐸とて金口木舌(口は鐸の振りの當りて音を發する處)のものを用

ゐ、武事には金鐸、卽金舌金口のものを用ゐるのである、字引に鐸の圖が出て居るのを見ると、鐘形有舌で、鐘の頂部に柄が附いて居る、之を握つてジヤラン〳〵ト振るのである、又釋名には鐸は度にして、號令の限度也とあり、先づ木鐸(文敎用)の方から擧ぐると

毎歲孟春、遒人以木鐸徇于路、(書)遒人宣令之官、木鐸金鈴木舌、所以振文敎、(傳)

先雷三日、奮木鐸以令兆民曰、雷將發聲、有不戒其容止者、生子不備必有凶災、(禮記)

振木鐸於朝天子之政也、注、天子將發號令、必以木鐸警衆、(禮記)

正歲師治官之屬而觀治象之法、徇以木鐸、日不用法者、國有常刑、(周禮天官小宰)

天將以夫子爲木鐸、(論語)

孟春之月、群居者將散、行人振木鐸徇於路、以採詩獻之、大師比其音律、以聞天子、(漢書食貨志)

獻歲刑書、旣應縣法、上春木鐸、方須徇人、(庾信荅趙王啓)

天爲木鐸九州知發號之期、吾豈匏瓜一國有來蘇之堂、(楊烱長江縣孔子廟碑)

遒人之木鐸旣徇、天子之金章始懸、(顏眞卿象魏賦)

又遣遒人持木鐸遍採歌謳天下過(元稹詩)

國家古典修時令順命遒人之職執木鐸以徇(白行簡振木鐸賦)

振木鐸而施令正銅儀而御極(閻隨侯西嶽望幸賦)

爲百氏之指南、作九州之木鐸(李商隱爲先輩、獻集賢相公啓)

古淡啜鍘羹、大雅鏗木鐸、(王禹偁酬科放詩)

仲春之月、雷始發聲、先雷三日、振鐸以令兆民、(淮南子)

禹之治天下、以五聲聽、門懸鐘鼓鐸磬而置鞀、以得四海之士爲銘於簨簴曰、教寡人以道者擊鼓、教寡人以義者擊鐘、教寡人以事者振鐸、告寡人以憂者擊磬、語寡人以獄者揮鞀、此謂五聲、(鬻子)

國家敷文教布時命、爰振鐸於九衢、將採詩於萬姓(王起振木鐸賦)

盛年才氣自無雙、振鐸長沙佐泮黌、(劉銑送彭宜賓詩)

昨日方爲宣城客、金鈴交通二千石、(李白)

金鈴一笑話疇昔、便有樂事酬佳辰、(陳造)

武事傳令警醒用の例は

中春教振旅兩司馬執鐸(周禮夏官大司馬)

天子夾振之而駟伐盛威於中國也、注、夾振之者玉與大將夾舞者振鐸以爲節也(禮記)

中冬教大閱中軍以聲令鼓鼓人皆三鼓司馬振鐸羣吏作旗車徒皆作

鼓行鳴鐲車徒皆行及表乃止三鼓槌鐸羣吏弊旗車徒皆坐(周禮夏官大司馬)

吳王秉抱親就鳴撞鼓丁寧錞于振鐸勇怯皆應三軍皆譁卻以振旅其聲動天地(國語)

良馬金鏤玉珂兵振鐸夾路(唐書南詔傳)

以金鐃止鼓以金鐸通鼓(周禮地官鼓人)

聲鼓金鐸所以威耳旌旗鉞幟所以威目禁令形罰所以威心(吳子)

秦攻魏鼓鐸之音聞於北堂(戰國策)

三軍浩漫、言不相聞、故爲之鼓鐸以通其耳、(新論)

旁午降絲綸、中堅擁鼓鐸(韓愈郾城夜會聯句)

凡舖卒皆腰革帶懸鈴持鎗挾雨衣賫文書以行(元史兵志)

寂歷簾櫳深夜明、睡廻清夢戍牆鈴(孔平仲詩)

神國たる我邦とは異りて、彼地には鈴を神樣の御用に使た例が自分には一向見當らぬ、

解襟庸房裏、神鈴鳴情衆(雲笈七籤)

なぜ、神字があるからとて早呑込は出來まい、神か、眞か、仙か、同書の「帶月銜日、建符執鈴、又「右回金璫、左旋玉鈴」も其通り

此に反し、寺院には盛に用ゐてある、それも有音の垂飾卽風鈴とし

てゞある。

松風晩吹撞金鐸、竹蔭寒苔上石梯（温庭筠清涼寺詩）

銅池數滴桂上雨、金鐸一聲松杪風（皮日休）

薫風穆然來、殿角鳴金鐸（韓維游龍興寺經藏院詩）

寶鐸旦參差、名香晩芬郁（梁昭明太子講席詩）

燭銀踰漢汝、寶鐸邁昆吾（梁簡文帝同泰寺浮圖詩）

寶鐸夜響銀地朝鮮（劉潛平等刹下銘）

月殿曜朱旛、風輪和寶鐸（劉孝綽詩）

月低璫鏡、星連寶鐸（王勃飛烏縣白鶴寺碑）

金猊散香霧、寶鐸韻天風（張耒秋日法雲詩）

香荷疑散麝、風鐸似調琴（李遠慈恩寺避暑詩）

夜久月高風鐸響、木魚呼覺五更眠（張耒宿柳子觀音寺）

園徑露螢粘濕草、塔簷風鐸亂疏更（陸游）

鏘々欄鐸、聲傳桂葉之風（王勃飛烏縣白鶴寺碑）

欄鐸無聲鳥語稀、徑深鐘梵出林遲（呂祖謙）

高鐸數聲秋撼玉、霽阿千里曉横銀（杜牧宿長慶寺詩）

僮能躡孤刹、鳥慣觀撞鐸（陸龜蒙）

韻鐸翻天籟、危觚駐夕紅（蘇舜欽薦福塔聯句）

冷鐸殘香僧舍開、斜風細雨坐中來(孔平仲)

日晚嚴城鼓、風來蕭寺鐸(宋齊丘)

莊嚴寺有玉九子鈴、以施潘妃殿飾(南史齊東昏侯紀)

珠幡轉曜、寶鈴韻響(梁簡文帝序)

清梵夜聞、風轉百常之觀、寶鈴朝響、聲揚千秋之宮(梁元帝碑文)

上風吹法鼓、垂鈴鳴畫軒(梁簡文帝詩)

玉鳳銜鈴、金龍吐珮(洛陽伽藍記)

寶地如池沙、風鈴如樹響(王臺卿)

風鈴亂僧語、霜柄欠猿啼(李洞)

金刹天開畫、鐵簷風語鈴(錢惟善)

浮雲變滅知何在、閑聽松風語塔鈴(鄭元祐)

以上の如く風鈴の詩文に入れる其大部分は寺鈴である、邦語の「ふうりん」は彼地でも風鈴と書き、又風鐸、簷鐸、欄鐸(欄ト簷トハ相同シ)垂鈴とも云ふ寺の分には又寶鐸、塔鈴、寶鈴などの稱もある。

何といつても鈴の風流閑雅なるものは風鈴に如くはなし、其中でもお寺の垂鈴が最も莊嚴であり又閑雅であるから、斯く寺鈴に關した句が多いのであらう。

夜深殿突兀、風動金瑯璫(杜子美)

はいかにも名句である、宋の周紫芝の竹坡詩話に云く

余頃年游蔣山、夜上寶塔、時天已昏黑、而月猶未出、前臨大江、下視佛屋崢嶸、時聞風鈴鏗然有聲、忽記杜少陵詩、夜深殿突兀、風動金鄉璫、恍然如己語也。

と、周が平生いかに此杜句に心服せるの深きかゞ知れる。

塔鈴の中には、風に由らずして自然に鳴るといふ、怪しげな塔鈴の話がある。

石勒死之年、天靜無風、而塔上一鈴獨鳴(晉書佛圖澄傳)

なぞ吉事でもなさうだ、又法苑珠林の

醯羅城中有小塔、而多靈異、人以手觸基上、塔鈴大震動

は怪談の樣なり。

塔鈴の中から地金の所自の貴重なものを聽き辨へた話がある、羯鼓錄に曰く

宋沆待漏於光宅佛寺、聞堂上風鐸聲、傾聽久之、朝回復止寺舍、問僧曰、上人塔上鐘、皆知所自乎、曰不知、沆曰、其間有一是古製、某請登塔歷叩以辨之、僧許、乃叩而辨焉、曰此姑洗之編鐘耳。

占風鐸といふも風鈴の變形物である、開天遺事に

岐王宮中於竹林內、懸碎玉片子、每夜聞玉片子相觸聲、卽知有風、號爲

占風鐸。

とあり、又音も音だらうが、飾り付けに無暗に澤山な鈴鐸を施し、以て寺の莊嚴を裝ふた例として

永寧寺有承露盤金盤卅重、周匝皆垂金鐸、復有鐵鏁四道引刹向浮圖四角鏁上亦有金鐸、鐸大小如一石甕子、浮圖九級、角々皆懸金鐸、合上下有一百二十鐸(洛陽伽藍記)

の如き、又

永寧寺繡柱金鋪、駭人心目、高風永夜、寶鐸和鳴、鏗鏘之音、聞及十餘里(洛陽伽藍記)

景明寺金盤寶鐸、煥爛霞表(同上)

なぞ大したものに見ゆ。

鈴の音律に關係する話としては晉書荀勗傳の

初勗於路逢趙賈人牛鐸、識其聲、及掌樂音韻未調、乃曰、得趙之牛鐸則諧矣、遂下郡國悉送牛鐸、果得諧者。

を基として

自歎龍鐘、誰知牛鐸(胡曾謝賜錢詩)

樵歌俗韻、牛鐸凡音(顧雲謝徐學士啓)

又如牛鐸應黃鐘、水中躍出蠻賓鐵(王庭珪翠樾堂中雪詩)

偶然尊酒相勞苦、牛鐸調與黃鐘同(黃庭堅荅元輿詩)
聲名惜馬纓、音律辨牛鐸(馬祖常詩)
誰知賈人鐸、能使大樂諧(韋應物詩)
なぞの句が出て居る、度信が爲晉陽公進玉律秤尺斗升表にも
聞鐘洛浦、卽辨聲乖、聽鐸邯鄲、先知響韻、
とありて前者に幾し
豈意聞周鐸、翻然慕舜韶(李商隱)
其外周書の長孫紹遠傳に
紹遠爲太常、廣召工人、創造樂器、土木竹絲、各得其宜、惟黃鐘不調、紹遠
每以爲意、嘗因退朝經韓使君佛寺前過浮圖三層之上有鳴鐸焉、忽聞
其音、雅合宮調、取而配奏方始克諧
と前の宋沇の話に肖て居る。
帝入閣卽於內奏胡伎鞞鐸之聲震響內外(南史齊鬱林王紀)
入周仕爲大學士上令妥考定鐘律于是作淸平瑟三調聲又作八佾鞞
鐸巾拂四舞(北史何妥傳)
顧視東西廂、絲竹與鞞鐸(曹植當車以駕行)
巴渝代起鞞鐸響(王粲七釋)
就中齊代及秦楚巾拂鞞鐸爭傳譜(吳莱樂府)

鐸鈴也、周禮、以金鐸通鼓(宋書樂史)

等も皆音樂部類のものなり

天寶遺事の寧王至春時、於後園中、紉紅絲爲繩、密綴金鈴、繫花梢之上、毎有烏鵲翔集、則令園吏掣鈴索以驚之、蓋惜花之故也、は是所謂護花鈴にして、鈴の中の華奢殺風景なるものに屬す又同書の五王宮中、各於庭中、竪長竿、掛五色旌於竿頭、旌之四垂、綴以小鐸、有聲卽視旌之所向、以知四方之風候也、は風鈴の中の特に氣象用のものと見て可なり。

斷腸に堪へざる鈴は太眞外傳の「上至斜谷口、屬霖雨彌旬、於棧道中、聞鈴聲隔山相應、上旣悼貴妃、因採其聲、爲雨霖鈴曲、以寄恨焉」白樂天長恨歌には行宮見月傷心色、夜雨聞鈴斷腸聲とあり

杜詩にもある鸞刀縷切云々の鸞刀は詩經の「執其鸞刀」より出で其鈴に云ふ如く鸞は鈴也で刀環に鈴有りて其聲節に中るものの是なり。

道中用の鈴としては郵鈴、驛鈴、馱鈴なぞである。

不眠驚戍鼓、久客厭郵鈴(唐彥謙)

道滓愁車轍、橋危避馱鈴(陸游)

路盤暫見樵人火、棧轉時聞驛使鈴(韓偓)

太白初昇北斗落、行人早起車鳴鐸(高啓)

羣語車鐸間、尙想兒女喧(晁冲之)

馬嘶車鐸鳴、群動不遑安（黄庭堅）

雲間鬧鐸驟駝去、雪裏殘骸虎拽來（盧延讓）

晨起動征鐸、客行悲故鄉（温庭筠）

其外犬の首環用、又は鷹匠用の鈴もある。

金鈴犬犹梧桐月、朱鬣馬嘶楊柳風（韋莊）

犬嬌眠玉簟、鷹擲撼金鈴（李商隱）

有名な任昉といふ先生のお母さんは、鈴が懷中に落ち込んだと夢みて昉を生む、幼にして聰敏、早く神悟と稱せらる、とは南史の載する所である、鈴も色々な方面に御用を務めるものかな。

鈴の葬儀用のものは挽鐸と稱せらる。

挽鐸已流唱、歌童行自喧（王褒送觀寧侯葬詞）

挽鐸鏗其競喧、旒旐儼其齊列（劉子玄昭成皇后冊文）

此外擧げ來れば、尙ほ鈴鐸に關する事柄はいくらもあるが、話が最早茲まで落ち、且つ自分も大分倦んだから茲等で御免蒙るとしやう。

（藤井乎雄記）

邦人の古作鈴の詩僅かに二首を索め得たるに過ぎず、古歌は數多あらんも旁搜に遑なく數首を得るに止まる明府の台命に背くは偏に謹謝する所である。（藤井乎附記）

嫁猫　海野蟻齊

自愛女奴如弄璋。而今受聘嫁隣莊。貧家元是無奩具。鈴索綿茵共一箱。

牛鐸　萬波醒廬

探梅十里共吟行。虛谷遙迢生隱情。久座細談日將夕。醉聞牛鐸過門聲。

鈴　松岡萍水

唐代王侯太有情。貪看紅紫帶餘酲。東風鈴索鳴相和。空使園林鳥雀驚。

贈何有明府　兒島簑丘

司牧多年令德馨。三州遍見此民寧。春風偏向廳堂滿。吹動鏗々岡字鈴。

社日偶成　岡西　鯉山

共賽田神祝太平。老農帶醉說春耕。豊年有兆君知否。塔上金鈴相和鳴。

塔鈴　入澤　所江

層塔聳松間。白雲過檻角。長風吹寶鈴。都似聞天樂。

同

護花鈴　赤木　松堂

上林風日暖。爛熳百花香。忽聽金鈴響。驚禽散夕陽。

咏鈴　並引

笠井明府以鈴形爲岡山縣章蓋取警世意也因作四句聊演其義云

明府風流愛鐸鈴。案頭落落古銅青。聲聲亦足發深省。願使世人傾耳聽。

風鈴　池田　長谷

午風吹鐵馬。簷下響鏘鏗。不見園丁掣。如聞驛使聲。花梢驚夢蝶。柳外亂啼鶯。二十四番信。傳來韻最清。

呈何有閣下　原　苔石

吉備山川秀且靈。振興文物見儀型。使君心事人如問。笑指廳堂木鐸鈴。

何有閣下募縣章詩歌因賦　武知　鳴峽

千形萬狀發清音。和得神人歲月深。試亘古今論効用。丁東總有警醒心。

同　藤井　雙川

金脣木舌響錚々。問俗採詩春可行。惠雨仁風人盡望。政聲清似鐸清聲。

鈴

宮人のあゆひのこ須受落ちにきと
　宮人とよむ里人もゆめ　讀人不知

つむかぬに須受が音聞こゆかむしたの
　とのの長ちしと狩すらしも　仝

須受か音のはゆまうまやのつつみゐの
　水を賜へないもかたた手よ

大前小前宿禰

ふる事をときのいとまに鈴ふりて　井上通恭

神代の聲をきゝし人はも　佐々木信綱

美嶽のや神のはに鈴うちふれは

神代覺ゆる音のさやけさ

鈴

岡直廬先生選

くらき夜の窓の外ちかく猫の兒のいましかへるかすゝの音する　淺口　中塚正齋

ふるもしの鈴のしるしにをか山のあかたの名さへなり渡るらむ　齋垣内　金尾直樹

をかやまの山まつかせにたくひつゝ鈴のなるねはさやけかり鳧　同　田邊貞子

誰もよくきゝてわくらむをか山のしるしの鈴のたかきそのねは　吉備　淺沼尚文

世にたかくうちひゝかせよ岡やまのしるしとなりし鈴の其音を　勝田　岸本正嘉

すゝの音にまよひの夢やさめぬらむ神のみ前に今日もまゐりて　御津　片山濱太

さくすゝのいすゝの川のかはかみにきくもたふとき鈴のおと哉　岡山　川澄千代子

同　川澄雅山

司人のゆくてのみちのやすかれとうまやにおきしすゝや此すゝ　兒島　津田榮子

神すきの木の間にひゝくすゝのねは君か代いのる神樂なるらむ　齋垣内　岩村榮子

千早ふる神のみまへになる鈴のおとすか〳〵しみ代いのるらむ　都窪　大橋平右衛門

むかしより神をいさむる鈴の音のいまなほきよく世に聞えける　岡山　深見等

するとほくなりわたるらむをか山のしるしの鈴のよもに響きて

千はやふる森の木の間に君か代を八千代といのる鈴の音そする　淺口　仁科　睦子

御やしろに鈴のひゝきの聞ゆるはたれのまうてゝ何いのるらむ　岡山　小野　光子

ちはやふる神のみ前のみかくらにうちふる鈴のおとのさやけさ　兒島　大塚　精一

けかれたるこゝろをすます鈴のねを正しき道のしをりにはせむ　都窪　赤木　一二

そのおとのたかくも鳴りて聞ゆなり鈴てふ文字の國のしるしは　淺口　工藤　敏夫

ゆくすゑのさちをいのるかなる鈴のひゝきわたれり產土のもり　岡山　赤澤　氏温

朝またき神のみすゝのおときけはたゝ何となくたふとかりけり　同　藤田　道貫

をか山の名こそはいよゝひゝくらめけふふりそめし鈴の高ねに　齋垣内　中島　武子

岡やまのしるしとなりて幾千代もおとのかはらぬ鈴はこのすゝ　吉備　御船　清太郎

をか山のしるしとなりし鈴の音は外くにまてもなりわたるらむ　同　堀藤太郎

をかやまのしるしとなりて日に月に鈴のなるねはさえまさる覽　同　中川類子

岡やまのすゝのなるねはもろ人の耳にさやけくすみわたるらむ　同　浅野米三郎

山てらのかねのひゝきにさそはれて鈴の音すなり峰のあらゝき　御津武藤千代

神さひてしけれる杜の木かくれに聞くもさやけき鈴のおとかな　兒島鴨井讓一

廣まへにうちふる鈴のひゝきこそ其名にもにてすゝしかりけれ　都窪久保晴枝

いにしへの早馬つかひのふりしよを今なほしのふ驛のすゞの音　岡山原鎮子

おほ神もよろこひまさむ鈴の音のきよくさやけき今日のみ神樂　浅口荒木松翠

傳へきて代々をふるともこの鈴の音にまさりてさやけきはなし　岡山久郷せむ子

みやしろの鈴の音きけはおのつから心さへもそすぐしかりける　同　筒井吉彌子

いくはくの人やまうつるさやけくも鈴の音きこゆ神のみまへに　齋垣内　岡田滋子

少女子かもゝの小かえたをうちふりてあしなみ高くをとる鈴の音　岡山　藤原小靜

わか門につねにかゝりて來し人をまつそしらするはしき鈴の音　同　近藤二三子

よひすゞの音またすなり人をいまおくり出してほともへなくに　淺口　河田確雄

馬ひきてとなりの翁かへるらしゆふくれかたにすゞの音きこゆ　岡山　入澤政惠

をか山のあかたのかぎりひゞくらむしるしの鈴のたかき其音は　同　須田のゑ子

岡やまのしるしのすゝのその音は今よりよもになりひゞくらむ　吉備　畔柳貞子

ほりいてし鈴の音きけは高しまの宮居のこともしのはるゝかな　都窪　溝手倪子（十二年）

たちまちにひゝき渡らん眞金ふく吉備のあかたのこれの鈴の音　赤磐　尾崎竹太郎

眞金ふく中山のみやの鈴の音とさやにきこえむをかやまの名は　都窪　龜山亥十二郎

千はやふる神のみ代より今もなほかはらぬ鈴のおとのさやけさ　兒島　難波以磨子

をかやまのこれのあかたのしるしとていよ〳〵高く響く鈴の音　淺口　吉田壽一郎

みあかたのしるしの鈴のおと高くとつ國までもなりわたるらむ　同　吉田滿壽子

まかねふく吉備の宮居のひろまへにたえすも鈴の音そきこゆる　同　吉田桃枝

幾たひかすゝをならしてみやしろに祈るまこゝろ神やうくらむ　同　小野松蔭

岡やまのつかさにゆらく鈴の音にあかたの民もうちなひくらむ　都窪　太田彌一郎

ともすれはくもりかちなる世の塵をふりて清めむこれの鈴の音　苫田　池上登士雄

今もなほふる鈴の音は千早ふるかみよなからのものにそ有ける　岡山　西原甘川

岩とあけしそのいにしへもとりし鉾の鈴の響はさやけかりけむ　同　三宅關内

から猫のたはるゝさまそあはれなるおのれの鈴を玉にとりつゝ　同　三宅たき

をか山のあかたのしるし人とはゝ音もさやけきすゝとこたへよ　小田正木義仁

鈴のねもとほくきこえてをか山のあかたのほまれ高くも有かな　同　立神清亮

よに遠くきこえわたらむ岡やまは鈴てふ文字のしるしにはして　同　吉見義長

大きみの御つかひいまやつきぬらしすゝの音たかし吉備の驛路　岡山　福田常次郎

岡やまのしるしの鈴の高き音はとほきくにまでひゝきわたらむ　浅口　桑野靜惠子

とふ蝶のゆめや見つらむ猫の子のすゝふりたてゝ花にもつるゝ　同　難波敏行

眞金ふくわかをか山のしるしともなりし鈴の音よにきこえけり　上道　富岡幸平

ちはやふる神のみ前にはふり子かふる鈴の音はことにすゞしき　浅口　内藤三都子

鈴のおとの遠くひゞきてをか山のその名も廣くなりわたるらむ　岡山　中山寛

いその上ふりしむかしはすゞの音のいかにさやけき響なりけむ　同　本郷熊子

今もなほ音すかゝし廣まへにつりたるすゞのとしはふれども　浅口　藤原思齋

いにしへゆ神のみまへに年ふりてさやかにひゞく鈴のおとかな　同　中野篁

いまもなほ神のみまへにまひ姫のふりおもしろきすゞの音かな　岡山　高橋すみ子

玉ちはふ神のみすゞの音さえていのれる吾子のさちおもふかな　兒島　小松壽治

さえわたるこれのあかたのまつりこと印の鈴のねにもきくかな　川上　遠藤豊

まつりこと聞えぬ里もなからむと鈴をあかたのしるしにはせし　岡山　石津　廉

みかくらにうちふる鈴はさなからに神も嬉しときこしめすらむ　同　岡田　諒

あなたふとすか〳〵しくもなる鈴を神もめでゝやきこしめす覽　同　新谷　淑

みつきつむこまやゆくらむにきはしく鈴の音すなり吉備の驛ち　同　富田　清子

さら〳〵となる鈴の音におもはすも心さやけきかみのひろまへ　同　福田　梅子

ふりたつる清けき鈴のひゝきにもこゝろひとつにならむさと人　同　華山　海應

みかくらにみ子のうちふる鈴の音は御庭さやけき心地こそすれ　同　福田　孝子

ちはや振神のみまへになる鈴のあなすか〳〵しひとのこゝろも　同　岡崎　靜子

あさことにたれかまうてし神殿のみまへの鈴のおとのきこゆる　後月　大上　花邨

いつくにも聞えわたらむをか山のしるしの鈴のおとのさやかに　岡山　宮脇久慶

きく人のこゝろこゝろにひゝくらむ高くかゝれる岡やまのすゝ　同　村田曳尾

きくまゝにこゝろもすみて廣前にならす小鈴のおとのさやけさ　同　安本克明

大神の見えぬみたまもふる鈴のさやけきおとはきこしめすらむ　仝　廣田謙吉

うるはしきあかたしるしの鈴の音はすか〳〵しくも鳴渡るかな　上房　杉木佐英

み神樂のにはにうちふる鈴のねはかみもさこそや嬉しかるらめ　吉備　荒木玉子

よるのほとに三たひひゝきしすゝの音や　岡　直盧

三國にわたるしためなりけむ

大正八年四月十五日印刷
大正八年四月十八日發行

岡山縣內務部

代表者　高見章夫

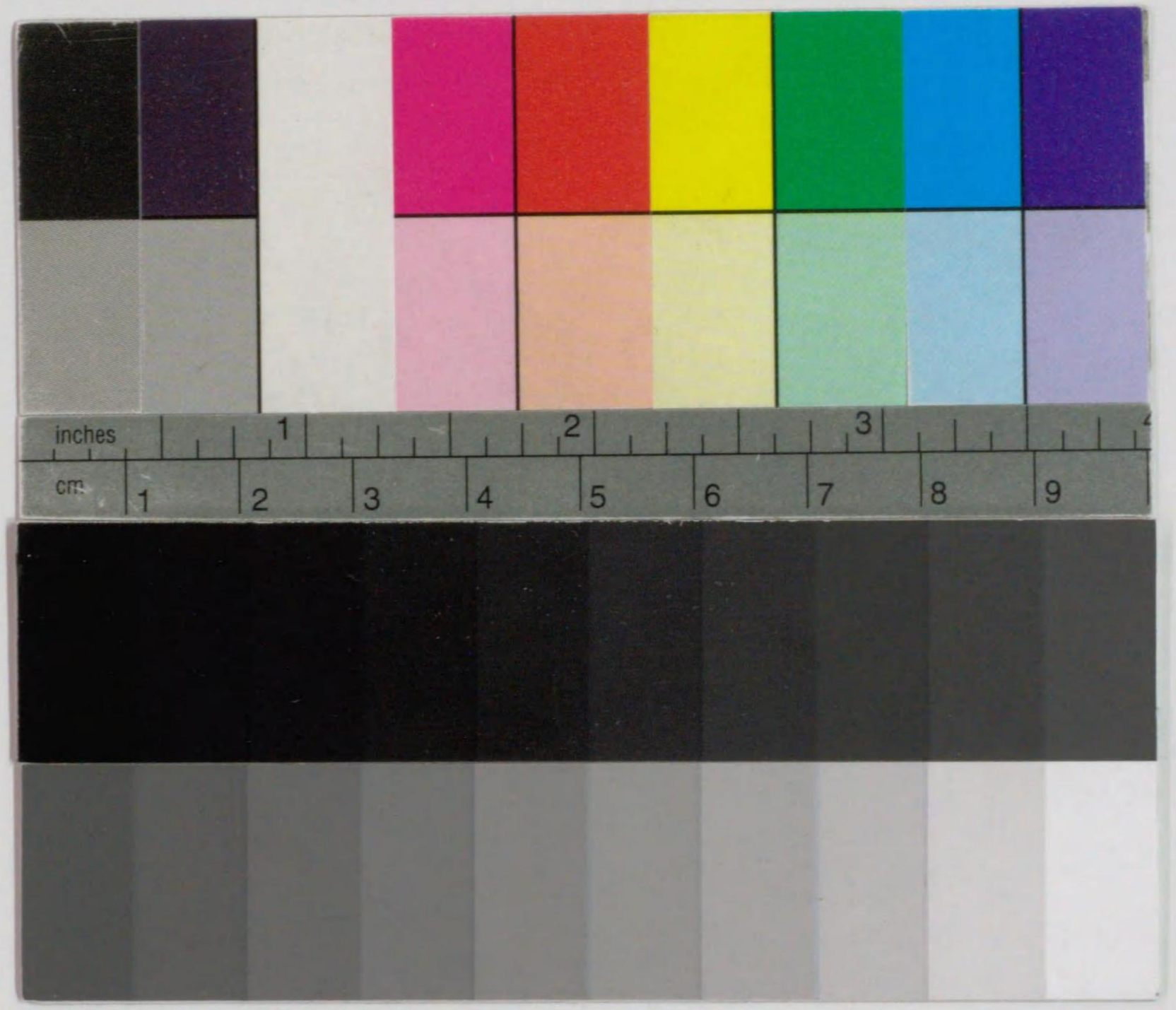
印刷者　岡山市大字船頭町八十二番地ノ一　安井宇吉

印刷所　岡山市大字西中山下百五十四番地　山陽新報社印刷部

186
254

詩

書


inches
1
2
3
4
cm
1
2
3
4
5
6
7
8
9